

## 第一次ユダヤ戦争に見るフィロカイサルたちとその系譜

秦 剛 平

神殿の炎上と都エルサレムの喪失で終わった対ローマのユダヤ戦争（後六六―七〇年）についてわれわれが詳しく知るの、もっぱら同時代のユダヤ人フラウィウス・ヨセフスがギリシア語で書き残した『ユダヤ戦記』全七巻からである。この書物の原題、ないしは早い時期に冠せられたと思われる表題は『陥落について』（ペリ・ハローセオー）であったが、その書物自体は一般に『ユダヤ戦記』として知られるため、われわれはしばしばこちらの表題から、パレスチナのユダヤ人たちが一丸となってローマの圧政に抗議して立ち上がり、ウェスパシアヌスやティトスの率いるローマ軍を相手に勇猛果敢に戦ったというイメージをもちがちである。しかし、ヨセフスの『ユダヤ戦記』やその他の著作から抽出される次の諸事実を指摘されたらどうであろうか。すなわち、

- (一) ウェスパシアヌスがネロ帝の命令でローマ軍をアンティオキアに集結させたとき、そこに馳せ参じて忠誠の一番乗りをはたし、そればかりか補助軍を提供したのはユダヤの王アグリッパ二世である。
- (二) 対ローマの戦争が避けがたい事態になった六六年に、戦争の無謀さをエルサレムの群衆たちに向かって説いてみせたのはアグリッパ二世である。

(三) 戦争中のローマ軍の指揮官ティトス(後の皇帝)に恋をし、戦後の七五年に彼と結婚しようとしてローマにまで追いかけて行き、彼と一時期同棲したのはアグリッパ二世の妹ベレニケーである。

(四) エルサレム攻略の際(七〇年夏)、ローマ軍の陣営でティトスとともに指揮を取った参謀長はアレクサンドリアのユダヤ人哲学者フィロソンの甥である。

(五) エルサレム攻略の際、ティトスの傍らにいて城壁内の同胞たちに降伏を呼びかけたのはユダヤ人のヨセフスである。

(六) 戦争中や戦争が終わったときに、自分の領地にティトスやローマ兵たちを招き、彼らを慰労したのはアグリッパ二世である。

わずか六例であるが、これらはわれわれに對ローマのユダヤ戦争中のエルサレム(やその他の地)に、アグリッパ二世を中心とする「フィロカイサル」たちがかなりの数いたことを予想させる。

本論文は、ユダヤ戦争中の「フィロカイサル」(親カイサル派の者)や「フィロローマイオス」(親ローマ派の者)であったアグリッパ二世、その姉妹であるベレニケー、マリアンメー、ドルッシラ、そしてアレクサンドリアの哲學者フィロソンの兄弟であるアレクサンドロス・アラバルケースとその息子のティペリウス・ユリウス・アレクサンドロスを紹介するものであるが、この「フィロカイサル」や「フィロローマイオス」には紀元前のヘロデ大王(ユダヤ王、前三七年―前四年)に遡る系譜があったという理解に立ち、そのため最初にその系譜を外観する。

## 一 ヘロデ——フィロカイサルの系譜のはじめ

### A ユダヤの王への道

ヘロデは前七三年頃に、イドゥマイア人のアンティパテル二世とアラブ人のキュプロスの間にもうけられた子である（『古代誌』一四・二二一）。

これから明かなように、ヘロデは生粋のユダヤ人ではなく、その出自はユダヤの南の砂漠地帯である。イドゥマイア人（これはエドム人をギリシア語に音記したもの）は申命記二三・八で「おまえの兄弟」と呼ばれているが、ユダヤ人との彼らの関係は必ずしも良好なものではなく、詩篇一三七・七―九、哀歌四・二―一二、オバデヤ書一〇―一六などに見られる敵対的・侮辱的な感情から知られるように――彼らは前五六八年のネブカデネザルによるエルサレムの攻略の際、彼の忠実な手足となったと考えられた――、不浄な民族のひとつに数えられた。彼らは、前二二九年か二二八年にハスモン王朝のヨハネ・ヒュルカノスによってその地を征服されると、割礼を施されてユダヤ教に強制的に改宗させられ（前掲書二三・二五七以下）、そのためユダヤ民族を構成する民の一部と見なされ、その土地はハスモン王朝の行政区のひとつになる。しかし、彼らイドゥマイア人はユダヤ民族の者たちからは彼らと対等であるとは見なされず、つねに「半ユダヤ人」（セミ・ユーダイオス）と呼ばれて蔑まれた（前掲書一四・四〇三）。ヘロデの一族もその例外ではなかった。

この「半ユダヤ人」ヘロデのユダヤ民族の王への道程は次のものである。

（一）彼はまずローマのアントニウスによりユダヤの地のテトラルケースに任命される（『戦記』一・二四四、『古代誌』

一四・三二六)。テトラルケースとは「一国の四分の一の支配者」を意味するが、そこから転じて「小領主」を意味するテクニカル・タームである。ついで、(二)彼はオクタウィアヌス(後のアウグストゥス)により全シリアのエピトロポスに任命される(『戦記』一・三九九)。エピトロポスには「知事」の訳語が与えられたりする。そして、(三)彼は、前四〇年に、ローマ人への忠誠心を買われ、アントニウスの推挙により、ローマの元老院によりユダヤの王に任命される(『戦記』一・二八二―五、『古代誌』一四・三八六―九)。その王権は、後になって、オクタウィアヌスによって追認される(『戦記』一・三九一―二)。

われわれがここで注意したのは、ヘロデの支配の背後にはその最初からローマの元老院とカイサル(Ⅱカエサル)があったことである。そのため、彼は自らがフィロカイサルであることを示さねばならなかった。

## B フィロカイサルの証しとしての諸建造物

ヘロデの支配の時期は、通常、(一)前二七年から前二五年までの権力基盤の確立の時期、(二)前二五年から前二三年までの繁栄の時期、そして(三)前二三年から前四年までの家庭内のトラブルに悩まされた時期に分けられる。ヘロデは、ハスモン一族の係累を排除して自らの権力基盤を確立した後の繁栄の時期に、カイサルへの忠誠の証しとしてパレスチナの内外に諸建造物を建てる。

スエトニウス『アウグストゥス』五九―六〇の証言によれば、ローマの属州の多くがアウグストゥスを記念して神殿や祭壇を建て、彼の友人の王たちや同盟者たちはそれぞれ自分たちの領地の中に「カエサレア」(Ⅱギリシア語読みではカイサレイア)と呼ばれる町を競って建てた。したがって、このアウグストゥスの時代と一致するヘロデの繁

栄の時期の土木事業は、スエトニウスの証言に照らして検証してみる必要があるが、ヘロデにとってはカイサル的好意や助けなくしては何事も達成できなかったから、彼はどんな犠牲を払っても、カイサルとの友好関係を維持せねばならなかった。そのため彼は、カイサルを記念する諸建造物を建てることで、カイサルへの忠誠を、ローマのカイサル自身に、そしてパレスチナのユダヤ人たちや非ユダヤ人たち（シリア人、ローマ人、ギリシア人）に示した。

(一) 彼はアントニウスの時代にすでに神殿の北の要塞を再建し、アントニウスを記念してそれを「アントニア」と命名する（『古代誌』一五・三三八以下、『戦記』一・四〇七）。

(二) 彼は後のアグリッパ二世の領地の一部になるパネイオンに神殿を建てる（『戦記』一・四〇三）。

(三) 彼はシリアの各都市やギリシアにもカイサルに捧げる神殿を建てる（『古代誌』一六・一四六以下、『戦記』一・四二二以下）。

(四) 彼はサマリアを再建してセバステーと命名する（『古代誌』一五・二九一。同書一六・一三六以下も参照）。

(五) 彼はストラトンの塔の建っていた場所にアウグストゥスに捧げる神殿や劇場を有する港町を建て、そこをカイサレイア（IIカエサレア）と命名する（『古代誌』一五・三三二—四一、二六・三三六—四一、『戦記』一・四〇八—一六）。ヘロデはこれらの建造物の他にも、前二〇年か前一九年にエルサレムの神殿の再建工事に着手する。その完成は彼の死後のローマ総督アルピノスの時代（後六二—六四年）である（『古代誌』一五・三八〇—四二五、『戦記』一・四〇—二）。もしそれが生前に完成されていたら、彼はそれを時の皇帝に捧げ、そのフィロカイサルの感情の一端を表明したであろう。何しろ、ユダヤ教はローマ帝国の「公認宗教」のひとつとして認知されたユリウス・カイサルとアウグストゥスの時代以来、神殿では一日に二回皇帝とローマ市民の安寧を願って犠牲が捧げられていたからである。

## C 「フィロカイサル」たちの再生産——ヘロデの子らとローマでの教育

ヘロデはハスモン一族の大祭司ヒュルカノス二世の孫娘マリアンメーとの間にもうけた二人の息子アレクサンドロスとアリストブロースをローマに送りカイサルの宮廷で「教育」(マセーマ)を受けさせている(『古代誌』一五・三四—三三)。

ローマから遠隔の地の王ヘロデの子息たちを預かることは、カイサルにとってたんなる好意ではなかった。彼にとってヘロデの子息たちはローマの傀儡王にフィロカイサルの姿勢を約束させる「人質」であったと同時に、宮廷で教育することによって彼らをフィロカイサルやフィロローマイオスとして育て上げて送り返すためでもあった。ヘロデは二人の息子を前二二年にローマに連れて行き、前一七年に連れ帰っているが、このことは彼らがもつとも多感な時期である一二、三歳のころから五年間もローマに滞在していたことを示している。カイサルから彼らの「教育」は終わったと宣告され、パレスチナへの帰国が許可された時点(『古代誌』一六・六〇)での彼らは、そのフィロカイサルの自覚的な水準はともかく、ギリシア語やラテン語を自在に操り、宮廷文化や、都ローマを飾る異教のさまざまな文化に違和感を覚えぬ「フィロローマイオイ」(「親ローマ派」)の立派な一員になっていたであろう。

ローマに送られて将来を囑望されたこの二人の息子は、晩年のヘロデとはうまくいかず、そのためヘロデは家庭内のトラブルを一々アウグストゥスに報告しなければならなかった(『戦記』一・五三五、『古代誌』一六・九〇—九九)。外国に長年暮らして帰国した子女が両親と折り合いが悪くなる話をよくあるが、ヘロデには内妻が一〇人以上はいたら、二人の息子たちにとってヘロデは必ずしも親しい父親ではなかったであろう。ヘロデは家庭内のトラブルの最終的な解決をカイサルの仲裁にもとめたが(『古代誌』一六・三三五以下、『戦記』一・一九五—九八)、この異常な事態の中

にも、この時代の他の属州の王のそれとは異なるヘロデの「フィロカイサル」の姿勢を見るべきかもしれない。アレクサンドロスとアリストブローロスは、後になって——前七年ごろか——、セバステーで父王ヘロデの命により投獄され、『古代誌』一六・三〇—二四、『戦記』一・四九〇、ついで扼殺される（『古代誌』一六・三九四、『戦記』一・五五一）。

## 二一 ヘロデの子らに見るフィロカイサルの姿勢

ヘロデの息子たちのある者は、父親のフィロカイサルの姿勢を踏襲し、政治的には一貫してカイサルの庇護のもとにあることをカイサルに訴えつづける。

### A フィリップス（前四年から後三三年または三四年）

フィリップスはヘロデとエルサレム出身のクレオパトラとの間の子である（『古代誌』一七・二一、二七他、『戦記』一・五六二、六〇二他）。

われわれはその時期を知らないが、フィリップスもアルケラオスと一緒にローマで教育を受けた。『戦記』一・六〇二に「この二人の王子たちは、ローマで教育を受けていたのだが、もう立派な若者になって男らしい元気にあふれていた」とあることから、フィリップスとアルケラオスはかなり期間ローマで教育を受け、異母兄弟のアレクサンドロスやアリストブローロスと同じように、フィロカイサル、フィロローマイオスとなって帰国したのであろう。彼が父王ヘロデのフィロカイサルの姿勢を踏襲した証拠は、彼がガリラヤ湖の北のヨルダンの水源である古代のパニアスを

拡大し、それをカイサルに捧げてカイサレイア（カエサレイア・フィリジ）と呼んだことにもとめられるであろう（『古代誌』一八・二八）。彼はまたアウグストゥスの娘ユリアをも忘れない。すなわち、彼はベッサイダの町を再建すると、彼女を記念してそれを「ベッサイダ・ユリア」と命名する（前掲書一八・二八）。

フィリップスは自分の領地内で通用する貨幣を鑄造したが、それにはアウグストゥスの像を、そして次のティベリウスの時代には、皇帝ティベリウスの像を刻む。ユダヤ教の十戒は「いかなる像も刻んではならない」とする。この戒めを破り、ユダヤ人たちの感情を逆なでしてでも貨幣に皇帝の像を刻んだ理由は何か。それは明らかに領地内のユダヤ人たちや非ユダヤ人たちに自分の「フィロカイサル」の姿勢を示すためだった。

#### B ヘロデ・アンティパス（前四年から後三九年）

ヘロデ・アンティパスはヘロデとサマリアの女マルタケーの子である（『古代誌』一七・二〇、『戦記』一・五六―六四八他）。

アンティパスがローマで教育を受けた証拠はないが、彼は彼なりの仕方で父王のフィロカイサルの姿勢を示す。すなわち、彼はガラヤのセッポリスの町を要塞化すると、そこを「皇帝の町」の意で「アウトクラトリス」と呼ぶ（『古代誌』一八・二七）。彼はまた同じガラヤのエマウスの温泉近くで、かつて墓場だった場所を再開発して王宮を建てると、その町を皇帝ティベリウスを記念してティベリアスと命名する（前掲書一六・三三）。この町は小アジアやオリエントに多数つくられたヘレニズム的なポリスをモデルにしたもののひとつであるだけに、ローマ人も含む異教徒たちには歓迎されるポリスであった。彼はまたベータラムフタの町に城壁をめぐらし、そこを皇帝の妃の名にちな



んでユーリアと呼ぶ（前掲書一八・二七）。

### C アルケラオス（前四年から後六年）

アルケラオスはヘロデ・アンティパスの兄である。彼も、既述のように、ローマで教育を受けている。彼の領地はサマリアとイドゥマイアを含むユダヤ本体であった（『古代誌』一七・三二七―二二）。彼はその失政が災いして、統治の一〇年目に現在のウィーンに追放される（『古代誌』一六・三四―四四、『戦記』二・一一）。彼の追放後、その領地はローマの直接統治下に置かれる（『古代誌』一七・三五五）。

### 三三 ローマの直接統治下（後六年から四一年）のフィロカイサルたち

この時期のユダヤ教は依然として帝国の「公認宗教」のひとつと見なされ（『古代誌』第一四巻に挿入されている各種の勅令を参照）、エルサレムの神殿では一日に二回皇帝と帝国の民の安寧のために犠牲が捧げられる（フィロロン『ガイウスへの使節』一五七、三一七参照）。なお、『戦記』二・四〇九、四一四―一五によれば、この祭儀が中断されたのはユダヤ戦争の直前であり、その中断こそは、ローマ帝国への開戦の宣言となるものだった。神殿の祭儀がローマの保護下に置かれ、その執行が保証されるかぎり、たとえ大祭司の式服がヘロデの死後ティベリウス帝（後一四―三七年）のある時期までと、アグリッパ一世（次出）の死（後四四年）以降にローマ総督の管理下に置かれる屈辱があったとしても（『古代誌』一五・四〇四以下）、大祭司をそのヒエラルキーの頂上に抱くエルサレムの神殿を中心とする支配体制

は「フィロカイサル」たちで固められたであろう。もし大祭司の言動がカイサレイア駐在のローマ総督の意に反するものであれば、属国王にとって、その首のすげ替えはすみやかに断行しなければならぬ事柄であり、われわれはその例をいくつか知っている（たとえば、次出のアグリッパ一世の場合は『古代誌』一九・二九七、三二一・二五、三二六、三四一、アグリッパ二世の場合は『古代誌』一九・三三三以下、二〇・二二二・二三参照）。

#### 四 アグリッパ一世——ローマ人以上のローマ人

アグリッパ一世は、アリストブローロス一世とベレニケーが前一〇年ころにもうけた子である（『古代誌』一九・三五〇参照）。兄にヘロデ、弟にアリストブローロス二世がいる（『戦記』一・五五二）。

アグリッパ一世は、兄弟たちと一緒に父によって養育されたが（『古代誌』一八・一三三）、六歳か七歳のころ、すなわち前四年のヘロデ大王の死よりも「少し前の時期に」（オリゴン）、ローマに送られている（前掲書一八・一四三）。既述のように、父のアリストブローロスは、前七年ころに、ヘロデ王の命令によってセバステーで扼殺されているから、彼は母ベレニケーの一存でローマに送り出されたことになる。彼女がそうしたのは、息子の身の安全を恐れたからであろうが、同時にローマでの彼女の知己たちとの交わりのサークルの中に彼を置きたかったからである。

ヨセフによれば、ローマでのアグリッパ一世は、皇帝ティベリウスがその最初の妻ウィプサニアの間にもうけたドルッソス（ユリウス・カエサル・ドルッソス。前一二年頃—後二三年）と一緒に養育されて（『古代誌』一八・一四三。同書一八・一六五には「クラウディオスとそのサークルと一緒に育て上げられ」という表現が見られる）、母の知己である皇帝の

弟ドルッソス(前三八―九年。アウグストゥスの妃リウシアと彼女の最初の夫ティベリウス・クラウディウス・ネロの間にもうけられた子)の妻アントニア(三執政官のひとつマルク・アントニウスの娘、ゲルマニクスの母、将来の皇帝カリグラの祖母)に可愛がられたばかりか(前掲書一八・一四三)、将来の皇帝カリグラをはじめとする貴族たちの子弟と親密な交わりをもっている(『戦記』二・一七八)。彼がローマからパレスチナに帰還した時期は不明であるが、シューラー『歴史』第二巻、四四三頁はそれを二九年か、三〇年と推定する。彼は三六年にテトラルケースのヘロデを告訴するためにローマにやって来ているから(『戦記』二・一七八、『古代誌』一八・二二〇)、彼はそれ以前に少なくとも一度はパレスチナに帰還していることになる。もしその時期がシューラーの推定する二九年か三〇年とすると、それまでの彼のローマ滞在は三〇年以上の長きものとなる。彼はその鷹揚な性格と浪費癖が災いして無一物となり(その性格については『古代誌』一九・三三二以下参照)、ローマでの生活が困難に陥ったばかりか、パレスチナに戻ってティベリアスの市場の監督官の職を与えられても借金の取り立て屋に追いかけてパレスチナの各地を転々とする始末であったが、「ある事態が発生したために」(『古代誌』一八・二二〇)――『戦記』二・一七八によれば、アグリッパとヘロデ・アンティパスの間に何か深刻なトラブルがあったようである――、三六年の春にイタリアに戻る(前掲箇所)。皇帝のティベリウスは彼のローマへの帰還を歓迎するが、その訴えには耳を傾けない。そのためかどうかは別として、彼は後の皇帝ガイウスの機嫌を取ることに専念する。そしてある日馬車で遊びに出かけた彼は、ティベリウスが一日も早くガイウスに譲位するよう祈るとガイウスに言ったところ、それを盗み聞きしたガイウスの家僕によってティベリウスに通告されて皇帝の怒りを買ひ、そのため六か月間投獄される(『古代誌』一八・一六八以下。『戦記』二・一七九―八〇をも参照)。しかし、ティベリウスが三七年三月一六日に亡くなり、ガイウスが即位すると、彼はただちに釈放さ

れる。彼はガイウス治下の四年間(三七—四一年)は王として治め、そのうちの三年間は与えられたフィリッポスの領地を支配し(『古代誌』一八・二三七、『戦記』二・一八一、ディオオン『ローマ史』五五・八・二。フィロロン『ガイウスへの使節』三三四をも参照)、四年目にはヘロデの領地が加えられ(『古代誌』一八・二五二)、引き続きクラウディウス治下の三年間(四一—四四年)を王として治めることになるが、この間前記の土地にユダヤ、サマリア、およびカイサレイアをも加えられる(前掲書一九・三五—一五二)。

アグリッパ一世はガイウス・カリグラが皇帝になるのに助力したとか(ディオオン『ローマ史』五九・八・二)、アグリッパ一世ととくに親しかったアレクサンドリアの哲学者フィロロンにより、彼は「カエサル家の一員である」(『フラックスへの反論』三五)とか、「王にしてカエサルの友人であり」、しかも「ローマの元老院によって法務官の榮譽を受けた人物」(前掲書四〇)と言われている。ガイウス・カリグラが皇帝になるにはローマの元老院の承認がいるから、アグリッパ一世の助力というのは具体的に何を指しているのか不明であるが、われわれはこうした一連の資料の発言から、彼がローマである程度の政治的な力を行使できる有力な人物に成長していたことを知る。われわれはここに「半ユダヤ人」ヘロデから数えて三代目にローマ人以上のローマ人がその一族の系譜の中に誕生したことを知る。アグリッパ一世は、その与えられた法務官の榮譽により、元老院での着席を許されたのをはじめ、ローマでの祭礼のときなどに元老院議員の礼服をまとうて競技場の議員の席にすわったのである。

アグリッパ一世は、三八年の八月以降のある時期に王としてパレスチナに戻るが(フィロロン『フラックスへの反論』参照)、王としてのアグリッパ一世の評判は必ずしもよいものではなかった。パレスチナのユダヤ人たちにとって、フィロカイサルである彼は、ローマに顔が向きっぱなしの属国王という思いであったであろう。われわれにとつて興

味深いのは、その子アグリッパ二世の庇護を何かと受けたヨセフスが『古代誌』一九・三二八―三四で、アグリッパ一世の思いやりのある優しい性格について云々し、ついで同書一九・三三五―三七で王がベリュトスの市民に与えた数かずの恩恵に言及するが、その先の一・三五六―五八でアグリッパ一世がパレスチナのユダヤ人たちからいかに嫌われたかを示唆する発言をしていることである。ヨセフスによれば、カイサレイアで『戦記』二・二一九）アグリッパ一世が亡くなったと分かると、その地と――既述のように、そこはアグリッパ一世の祖父ヘロデの建てた町であった――とサマリアの町セバステアの住民たちは「口にするのも憚れるような侮辱的な言葉」を故人となった王に投げつけ、軍務に服していた者たちのすべては叛乱して自宅に戻り、王の娘たち（後出）の肖像画を持ち出し淫売宿（タ・プロネイア）に持って行くと、その屋上に置いて「語るも憚れるような」ありとあらゆる類の罵声を浴びせたばかりか、三途の川の渡し守りであるカローン（ギリシア神話）に献酒して王の死を祝って互いに乾杯したという。われわれはこの話をたんなるエピソードとして葬ることはできない。カイサレイアの住民が国王の娘たちの肖像画を自宅に所持していた事実は、アグリッパ一世がフィロカイサル の全体主義的な政治体制を強制していたことや、人びとがそれを持ち出して淫売宿に置いたり、王の死を祝ったという事実は彼らがそのような体制に忍耐・忍従の限界を感じていたことを物語るからである。ヨセフスは後六六年にはじまる叛乱の間接因のひとつをローマ総督の悪政にもとめるが、もしわれわれがヨセフスにならって叛乱の間接因をもとめてかまわないなら、アグリッパ一世のフィロカイサルの政治体制もまたそれを加速させるものであったと指摘できるであろう。

## 五 第一次ユダヤ戦争中のフィロカイサルたち

アグリッパ一世は妻のキプロスとの間に二人の息子アグリッパ二世とドルッソスと三人の娘ベレニケー、マリアンメー、ドルッシラをもうける。このうちのドルッソスは青年に達する前に亡くなっている（『戦記』二・二二〇、『古代誌』一八・一三三）。アグリッパ一世のこれらの子女たちが第一ユダヤ戦争中のフィロカイサルたちの中心となる。

### A アグリッパ二世

アグリッパ二世は父王のアグリッパ一世が四四年に亡くなったときには一七歳であったから（『古代誌』一九・三五四）、その誕生は二七年ということになる。ヨセフスによれば、彼は父が亡くなった四四年には「クラウディウス・カエサルのもとで養育されていた」というから（前掲書一九・三六〇）、そして五二二ころまではパレスチナに帰国した形跡はないとされることからして、少なくとも八年以上はローマに滞在していたと考えられる。彼はローマ滞在中に十分すぎるほどのギリシア語の知識を身につけたと思われる。その証拠は、ヨセフスからギリシア語で著された『ユダヤ戦記』を献呈されると、それを一読してその記録の真实性を保証する六二通の手紙をギリシア語で書いていることにもとめられる（『自伝』三六四、『アピオンへの反論』一・五一以下）。

彼は父が亡くなったときは若すぎるという理由から、父の領地を継承することは許されず、ファドスがユダヤと全王国のエパルコス（総督）として派遣される（四四―四六年）。そして伯父のカルキスの王ヘロデが四八年に亡くなるとその領地を継承し、五三年にはフィリッポスの領地（パタナエア、トラコニティス、ガウラニティス）、リュサ

ニアスの領地であるアピラと、ヴァルスの領地を加えられ、クラウディウスの死後も、ネロ帝によりガリラヤとペライアの重要都市、すなわちティベリアスとタリカイアイとそれらの周辺地域、ユーリアスの町と一四の近隣の村を加えられるが、『古代誌』二〇・一五九、『戦記』二・二五〇、この一連の加領はアグリッパ二世のフィロカイサルの姿勢とも関係するものであろう。彼は皇帝ネロの時代に王都であるカイサレイア・フィリピの名をネロニアスに改めたばかりか、『古代誌』二〇・二二二)、その発行した貨幣にもその名を刻み込んでいる(シュレーラー『歴史』、一卷四七四頁)。彼の発行する貨幣に関して言えば、そこには時の皇帝、すなわちネロ帝時代であればネロ帝の、ウェスパシアヌス帝時代であればウェスパシアヌスの、ティトス帝時代であればティトスの、ドミティアヌス帝時代であればドミティアヌスの名前と像が刻まれている。

アグリッパ二世のフィロカイサルの姿勢は、都市や貨幣以外のさまざまな面からも窺える。軍隊の提供である。たとえば彼は、アルメニアを確保するためのバルティア遠征では、ネロ帝の命令により、補助軍を提供している(タキトゥス『年代記』一三・七)。対ローマ戦争の直前にシリアからケステイオスが第十二軍団(全軍)と他の三軍団からの精兵たちを率いてやって来たときには、援軍を提供したコンマゲーネーの王安ティオコスやエメサの王ソアイモスらとともに、彼は三〇〇〇の歩兵と二〇〇〇以下の騎兵を提供したばかりか、ケステイオスの軍団の先導役を買って出る(『戦記』二・五〇二)。このケステイオスの軍団はエルサレム攻略の直前に不可解な撤退をしているが(前掲書一・五三三―四四)、この撤退のときからウェスパシアヌスのパレスチナ登場までの間、彼は王国の統治をノアルスなる人物にまかせてパレスチナに不在で、六七年の春までベイルートに滞在する。ケステイオスの撤退でエルサレムの叛乱分子は勢いづいたはずであるから、アグリッパ二世のパレスチナ不在は多分彼自身の身の安全のためであつたらう。

ウエスパシアヌスは六六年にネロ帝の命令により、陸路ブトレマイスに向かい、その地で集結させた軍勢(第五軍団、第十軍団)にアレクサンドリアから北上してきた息子ティトスの率いる軍勢(第二五軍団)を合流させるが、そのときアグリッパ二世は、コンマゲーネーのアンテリオコス四世やエメサの王ゾアイモス、アラブのマルカスらとともに援軍を提供する。彼は二〇〇〇の騎乗しない弓兵と一〇〇〇の騎兵を提供する。アグリッパ二世はそればかりか、戦争中、ウエスパシアヌスとその軍団をカイサレイア・フィリビに招いている。その目的は彼らを慰安すると同時に、領内の不穏分子を牽制することにあった。そのため彼らの滞在は二〇日間におよんでいる(『戦記』三・四四三―四四)。

アグリッパ二世はネロの死(六八年の六月九日)後、皇帝となったガルバに祝意を表明するためにティトスに同行してローマに赴く。ローマへの途次で、ガルバ殺害(六九年の一月一五日)の知らせを受け、ティトスはカイサレイアで待機中の父ウエスパシアヌスのもとに戻るが、彼はローマに赴きそこに滞在する(『戦記』四・四九八―五〇〇、タキトゥス『同時代史』二・一一二)。ウエスパシアヌスが六九年の七月に皇帝に推戴されると、祝意を表明するために、妹のベレニケーによって急遽パレスチナに呼び戻される(タキトゥス、前掲書二・八一)。ウエスパシアヌスは七〇年のエルサレム攻略をティトスに委ね、ティトス・ユリウス・アレクサンドロスを参謀長とするが(この人物については後述)、アグリッパ二世はティトスに再度援軍を提供したばかりか(タキトゥス、前掲書五・一)、彼と行動をともしはじめた。アグリッパ二世は、エルサレム陥落後にカイサレイア・フィリビで主催した祝宴でホスト役をつとめる(『戦記』七・二三―二四)。ティトスとその軍団を慰労するために野獣との格闘競技や剣闘士の競技など「多種多様な見せ物」を提供するが、多数の捕虜が野獣との格闘競技で落命するが、それを提供し、ティトスの傍らで見守るアグリッパ二世はもはやユダヤ人の王ではなくて、フィロカイサル化身となったローマ人であったであろう。アグリッパ二世と



次出のベレニケーのフィロカイサルの姿勢はユダヤの民族主義者たちの憎悪を買ったが、その憎しみの感情の激しさは戦争に突入する段階（六六年）で、彼らがその王宮を大祭司のアナニアスの邸とともに焼き討ちしたことから知られる（『戦記』二・四二六）。

## B ベレニケー

ベレニケーは、兄のアグリッパ二世と組んでユダヤの政治の舞台に飛び出した女性である。彼女は大概の場合はアグリッパ二世と一緒に行動を取ったようであるが、そのことは『戦記』の記述ばかりか、使徒行伝二五・一三―四の「数日経って、アグリッパ王とベレニケーが、フェストスに敬意を表するためにカイサレイアにやって来た。彼らが幾日もそこに滞在していたので、フェストスはパウロの件を王に持ち出して言った」や、同書二五・二三の「翌日、アグリッパとベレニケーが盛装して到着し、千人隊長たちや主だった人びととともに謁見室に入ると、フェストスの命令でパウロが引き出された」の記述が示唆する。アグリッパの不在中は単独でも行動した。

ベレニケーの最初の結婚相手はアレクサンドロス・アラバルケース（後出）の息子で、アラブの国やインドとの交易に従事していたマルコス・ユーリオス・アレクサンドロスであったが（『古代誌』一九・二七七）、彼女は、アレクサンドロスの死後、故人となった父王アグリッパ一世の兄であるカルキスの王ヘロデと再婚する（『戦記』二・二一七、『古代誌』一九・二七七）。この結婚の時期は四三年か四四年で、彼女はヘロデとの間にベレニキアヌスとヒュルカノスをもうける（『古代誌』二〇・一〇四）。ヘロデはクラウディウス・カイサルの治世の第八年、すなわち四八年に亡くなる（前掲箇所）。ヘロデの死後、彼女は「長い間」寡婦の生活を送るが（前掲書二〇・一四五）、兄のアグリッパ二世と同じ

ているという噂を立てられたりする（前掲箇所。ユエナリウス『風刺詩』六・一五六―六〇）。彼女はこの噂を否定するためにキリキアの王ポレモンと六四年以降のある時期に（シェーラー『歴史』一巻四七四）結婚するが、彼女が「奔放であつたために」（デイ・アコラシアン）、その結婚は長続きせず、エルサレムに戻っている。

ベレニケーの性格が奔放であつたというのは事実らしい。それを証明するのはティトスとの恋愛である。ティトス（誕生は四一年二月三〇日）のハンサムぶりやそのもつて生まれたタレントについてはステニウス『ティトス』が報告しているので、ここでは引かないが、彼女のティトスとの恋愛関係がはじまったのはガルバの死以前のことである。なぜなら、既述のように、新皇帝に祝意を表明するためにローマに向かう途次にあつたティトスは、ガルバの死でパレスチナに戻つたが、ティトスは一部の皮肉屋たちから「ベレニケーへの熱烈な慕情に負けて」パレスチナに舞い戻つたと噂されたからである（タキトゥス『同時代史』二・二参照）。この恋愛で興味深いのは、ベレニケーの兄アグリッパ二世がその恋愛を積極的に支援したことである。彼女は戦争が終わつた七五年にローマに赴き、ティトスとの恋愛を発展させ、宮廷に住んでティトスと同棲することになるが、アグリッパ二世は彼女のローマ行きに同道したばかりか、ティトスと妹ベレニケーの関係からだと思われるが、法務官の地位（帝政初期の法務官の定員は一二名）を与えられているのである（ディオソ『ローマ史』六五・一五・三）。フィロカイサル面目躍如たるものがある。もつともベレニケーの願いは実現しない。「彼女は彼（ティトス）との結婚を望み、すべてのことにおいてすでに彼の妻であるかのように振る舞つた。しかし彼は、ローマ人がこの関係を不快に思っているのを認めると、彼女を追放した」からである（前掲書六五・一五・四。ステニウス『ティトス』七・一をも参照）。ティトスの父ウエスパシアヌスは七九年の六月二三日に亡くなると、ベレニケーはティトスの気持ちに「変化があつたかもしれない」と考へてローマに再度

やって来るが、ティトスに無視され、失意のうちにパレスチナに戻る（ディオソ、前掲書六六・一八・一）。

### C マリアンメー

マリアンメーについて知り得るヨセフスからの情報はわずかなものでしかないが、それでもそれは重要である。彼女は父アグリッパ二世が亡くなった四四年には一〇歳であったとされるから（『古代誌』一九・三五四）、その誕生年は三四年となる。彼女は父王が亡くなった時点ですでにヘルキアスの子ユーリウス・アルケラオスと婚約し（『古代誌』二九・三五五）、父王の死後兄のアグリッパ二世によりアルケラオスと結婚させられ、二人の間には娘のベレニケーが誕生する（前掲書二〇・一四〇）。『アピオンへの反論』一・五一によれば、このアルケラオスは「ギリシア語の知識を身につけた多くの人びと」の一人で、前出のアグリッパ二世と同じようにヨセフスの『戦記』を買い上げて読んでいる。マリアンメーは、姉のベレニケーがカルキスの王ポレモンと離婚したころ（後述）、アルケラオスと離縁し、アレクサンドリアのユダヤ人たちの中で「家柄と財力の点では第一流の人物であり、当時アラバルケースの職（この職については拙訳『古代誌』一八・一五九の註参照）にあった」デーメトリオスと呼ばれる人物と結婚し、彼との間に一子アグリッピノスをもうける（『古代誌』二〇・一四七）。ヨセフスは先に進んで、マリアンメーとデーメトリオス、そして二人の間の子のそれぞれについて語ると約束するその言葉の時期から判断すると（その約束は実際には果たされていないが）、われわれはこの結婚が少なくともヨセフスが『古代誌』の最終巻を書いていた九四年ころまでつづいたことを知るが、それはアグリッパ二世やその妹ベレニケーにとってユダヤ戦争前にすでに「アレクサンドリア・コネクシオン」とでも呼ぶべきものが出来ていたことを教えてくれる。そして、後述するように、この「アレクサン

ドリア・コネクション」を介してだと思われるが、彼女はガイウスによって投獄されていたが、クラウディウスによって釈放されたアレクサンドリアのアラバルケースだったアレクサンドロスと結婚する。

#### D ドルッシラ

ドルッシラについて知り得る情報も少ない。

彼女は父アグリッパ一世が四四年に亡くなったときには六歳であつたとされることから、『古代誌』一九・三五四)、三八年に生まれたと推定される。父王により最初の結婚相手とされたのは、コンマゲーネーの王安ティオコス四世の子エピファネスであるが(前掲書一九・三五五)、彼が「ユダヤ人の慣習」(タ・ユードイオン・エセー)にしたがうのを拒んだために、実際の結婚には至らず、彼女は割礼を受けることに同意したエメサの王安ティオコスと結婚する(前掲書二〇・三三九)。この王は五三年か五四年に亡くなっていることからして、彼女の結婚は一五歳か一六歳以前となる。非常に早い時期の政略結婚となるが、その結婚はアズィゾスの死以前に解消される。その原因となつたのは、パレスチナに赴任してきたローマ総督フェーリックス(五二年ころ―一六〇年ころ)である。ヨセフスによれば、「彼はドルッシラを一目見て、その美しさが他のすべての女性よりもすぐれているのを知り、この人妻に情熱を燃やし」(『古代誌』二〇・一四二)たのである。彼女はフェーリックスの手練手管に負け、ついに「先祖伝来の律法の教えに背いてフェーリックスと結婚する」(前掲書二〇・一四三)。彼女は使徒行伝二四・二四で、フェーリックスの「ユダヤ人妻」として言及されているが、ここにヘロデから数えて四代目にローマ人と、しかもパレスチナにおいては土地の者たちからは「悪徳代官」と見なされ、また後になってタキトゥスによって「あらゆる種類の蛮行をやつてのけ、情欲

に惑溺する人物」(『同時代史』五・九)と評されたローマ総督と、選りに選ってパレスチナで結婚する者が出たのである。マリアンメーの結婚の相手には「ユダヤ教の慣習」の尊重がもとめられたが、もはやそれはドルツシラの結婚にはもとめられなかった。彼女の後見人的な立場にあったアグリッパ二世はユダヤの慣習の尊重に関心がなかったからである。ドルツシラはフェーリックスの間に一子アグリッパをもうける。このアグリッパとその妻(名前は不明)は七九年のベスピウス山の噴火のときにその犠牲者となる(ドルツシラとフェーリックスの結婚の経緯は、『古代誌』二〇・一三九、一四一―一三参照)。

#### E アレクサンドロス・アラバルケース

彼はアレクサンドリアの有力なユダヤ人一族の者でフィロンの兄弟(『古代誌』一八・二五九)として知られる。彼は、ある事件でガイウスの怒りを買って投獄されたときも、ガイウスの死後、彼の「旧知の友」クラウディウスにより釈放されたと言われているが(『古代誌』一九・二七七)、われわれはこのアレクサンドリアのユダヤ人とローマの帝室の間に存在した何らかの関係を覚えておきたい。その富豪ぶりは、彼がエルサレムの聖所にある一〇の門のうち九つの門に金銀の板金で裝飾を施したことや(『戦記』五・二〇五)、アグリッパ一世の妻キプロスに大金を貸していることから知れる(『古代誌』一八・一五九―一六〇)。

#### F テイベリウス・ユリウス・アレクサンドロス

この人物は前出アラバルケース・アレクサンドロスの息子で、哲学者フィロンの甥である。この人物を抜きにし

てはユダヤ戦争の最終側面のもっとも重要な部分を語れない。彼はローマ総督ファドスの後任としてパレスチナに派遣されるが、この派遣の裏には父のアラバルケース・アレクサンドロスとクラウディウスの関係があったはずである。彼が総督をつとめた時期は四六年ころから四八年までの二年間である。彼はこの時期にパレスチナの土地、中でもエルサレムのトポグラフィーや神殿に通暁するに至ったのは言うまでもない。アレクサンドロスの後任はクマヌスである〔戦記〕二・三三三〕。

ティベリウス・アレクサンドロスは、パルティアへの遠征ではコルプロに仕えるが（タキトウス『年代記』一五・二八・四）、後ネロ帝の信託を受けてエジプトの知事となる。彼がエジプト知事になったときには、アグリッパ二世は祝意を伝えるためにアレクサンドリアに赴いている（『戦記』二・三〇九）。ティベリウス・アレクサンドロスは、皇帝権がウエスパシアヌスに移譲されるときには、すばやく行動し、ユダヤに駐留していた軍団よりも早く、彼の軍隊にウエスパシアヌスへの忠誠の誓いをさせている（タキトウス『同時代史』二・七九。スエトニウス『ウエスパシアヌス』六・三）。そして彼は、七〇年のエルサレム包囲では、ティトスの六人の参謀の中心人物として活躍する（『戦記』六・二三）。彼はエルサレムの城壁内の模様や神殿の内部に通暁しているばかりか、「ティトスの友人の中ではもっとも忠実」（前掲書五・四六）な人物だったからである。もしエルサレムの神殿の焼き落としがローマ軍のイニシアティブによってなされたのであれば、ティベリウス・アレクサンドロスはまちがいなくその決定に参与した人物であったであろう。なお、既述のように、彼の息子マルコスがアグリッパ一世の娘ベレニケーと結婚している。

## 六 結びに代えて

われわれは六六年にはじまって七〇年までつづいた対ローマのユダヤ戦争中のユダヤのフィロカイサルたちである。アグリッパ二世をはじめとする幾人かの人物を紹介したが、それに先だってヘロデ王にはじまるフィロカイサルたちの系譜を外観した。

ヘロデ王はユダヤ民族出身の者ではなく、その彼はローマの元老院の推挙でユダヤ民族の王になった後も、ローマの後ろ盾をつねに必要とし、それをつねに意識し、それにたてつくことなどはまったくしなかった。それどころか彼は、多感な時期の息子たちをローマに送り、宮廷の教育を受けさせ、フィロカイサルとしている。そのうちのアレクサンドロスとアリストブローロス一世はローマから帰国後ヘロデとは折り合いが悪く、二人はヘロデによって処刑されるが、次のアリストブローロス一世の子アグリッパ一世にいたっては三〇年以上の長きにわたってローマに滞在し、宮廷を中心とするローマの政界で有力な人物の一人となっている。彼は三八年の八月以降に王としてパレスチナに戻ることが、彼を受け容れたパレスチナのユダヤ人たちにとってはユダヤ民族の特性などをまったく理解しないもう一人のローマ総督を送られたようなものであろう。彼がいかに嫌われたかは、その死の直後に起こったカイサレイアとセバステアの土地に住むユダヤ人たちのとった乱暴狼藉から分かる。

第一次ユダヤ戦争中のフィロカイサルの中心人物であるアグリッパ二世はアグリッパ一世の子である。彼もまた少なくとも八年以上はローマにいて、宮廷で養育された人物である。彼は父以上にフィロカイサルの姿勢を見せつけ、われわれに「アグリッパ二世——ローマ人になった男」といった印象を与える。ケステイオスの軍隊やウエスパシア

ヌスの軍隊に補助軍を差し出すのは属国王の義務であるから何の驚きでもないが、戦争中も戦後も自分の領地にローマ兵を招いて慰勞するメンタリティーは完全にローマ人のそれであろう。そしてまさにそれゆえに、たとえば、自分の妹ベレニケーのティトスとの恋愛を積極的に支援することができたのである。

第一次ユダヤ戦争はさまざまな側面がある。われわれが見落としがちなのは、エルサレムを中心にして存在したフィロカイサルたちの動向である。彼らはパレスチナの叛乱前も、叛乱の最中もユダヤ民族の視点からではなくてフィロカイサルの視点から見て、ローマの利益のために行動した。このフィロカイサルに連なる者たちの中から、神殿の焼き落としを提言する人物が現れたとしても不思議ではない。ヨセフスが『ユダヤ戦記』を献呈した相手というのはすべてアグリッパ二世に連なるフィロカイサルたちだった。これはヨセフス研究で留意しなければならぬ事柄である。